

18

897

曹洞宗
大本山
永平寺

019355-000-1

18-897

永平寺

日置謙／編

M41.9

ABG-0046

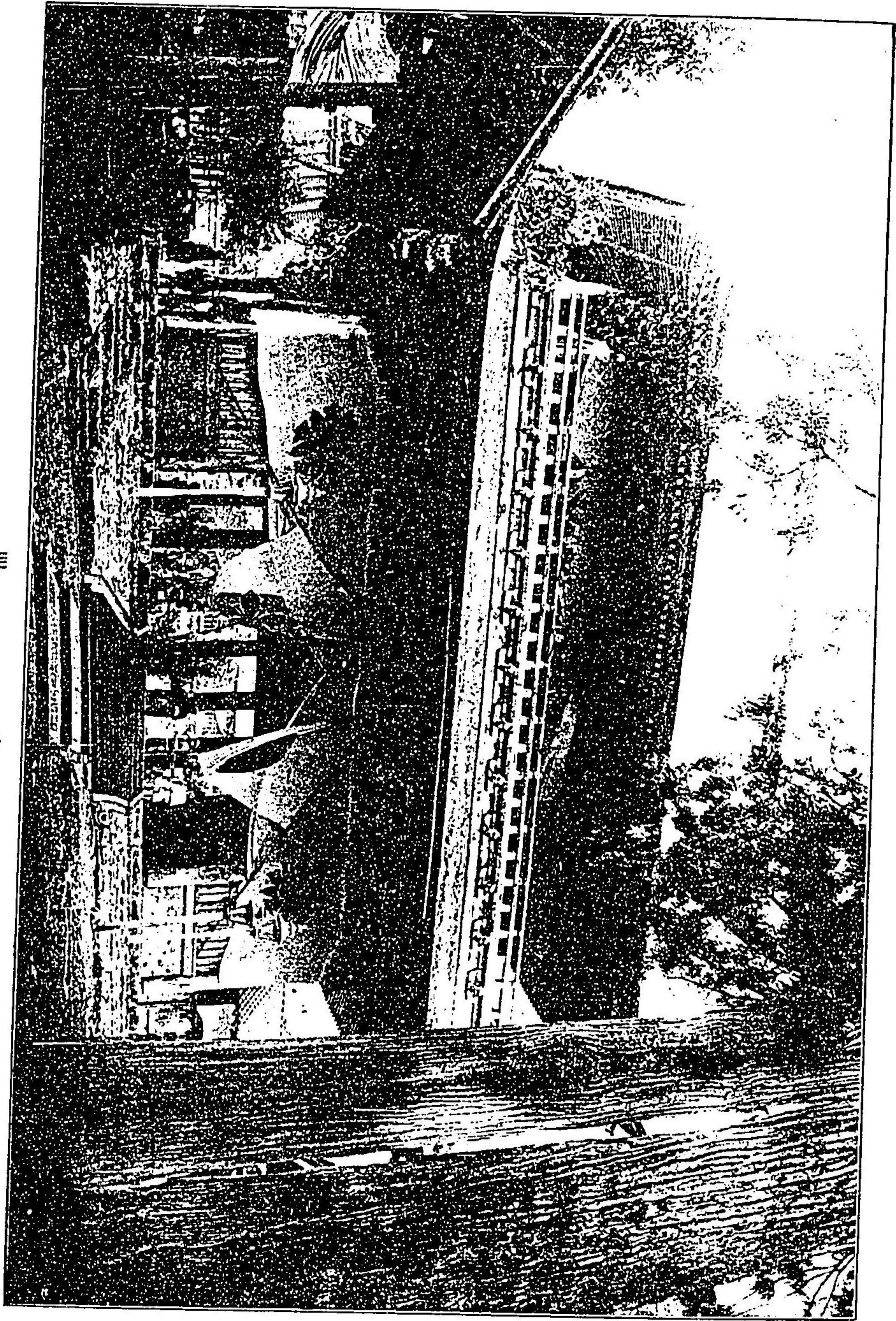


18-897



曹洞宗
大本山
永平寺

明治
11 9 22
内交



101

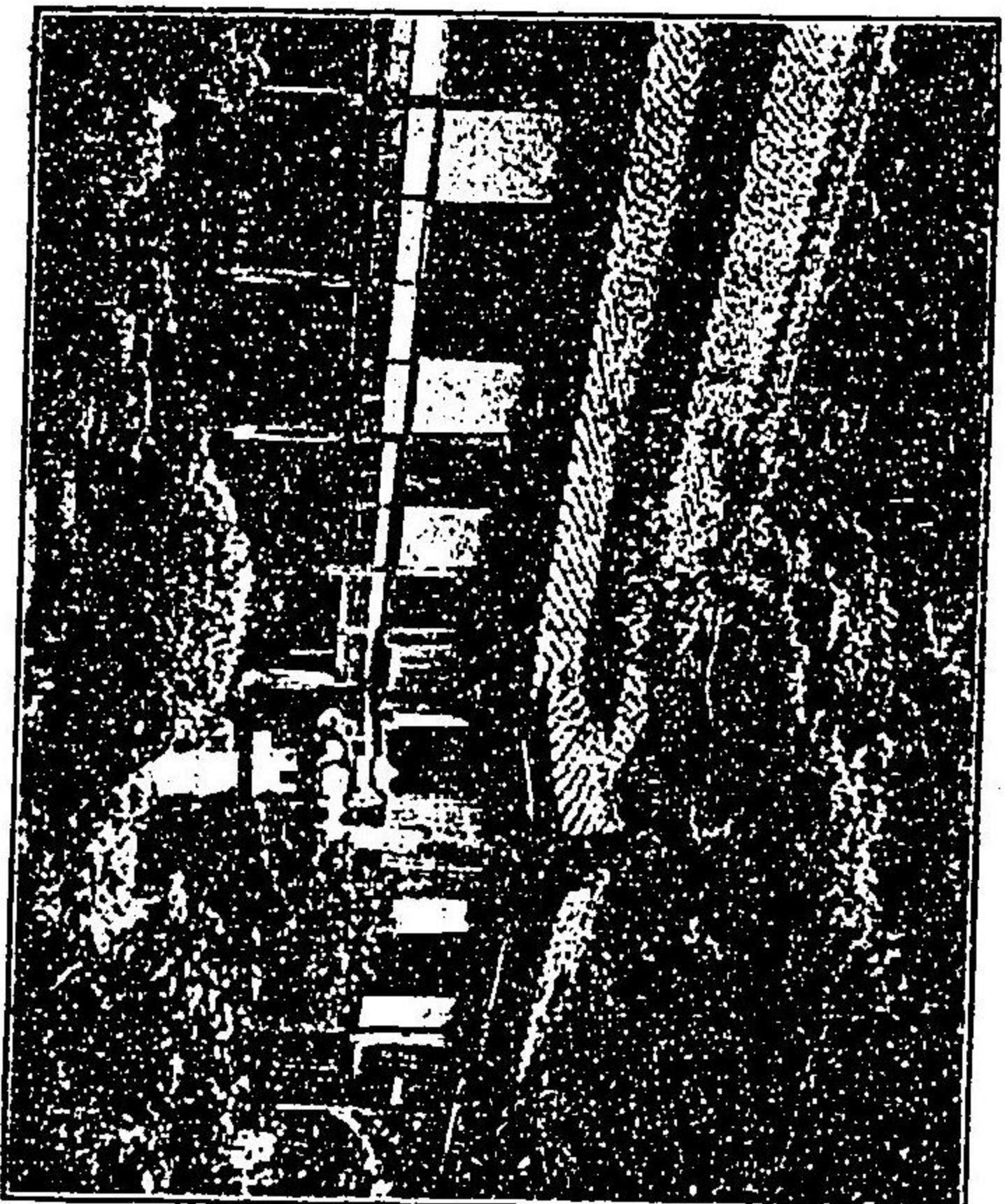
102



妙高臺及光明庵



勅使門



不老閣



瑞雲閣



堂 經



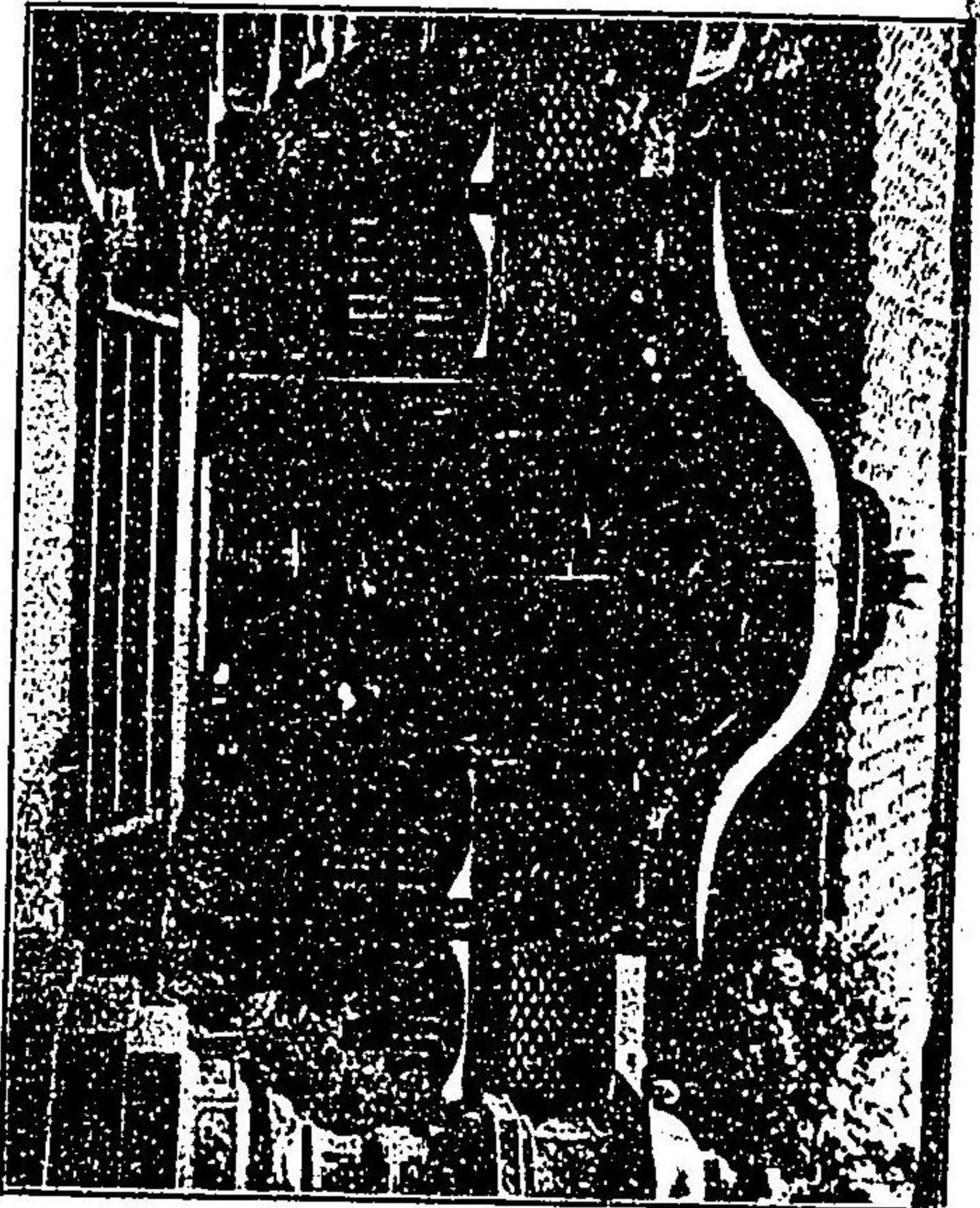
殿 利 舍



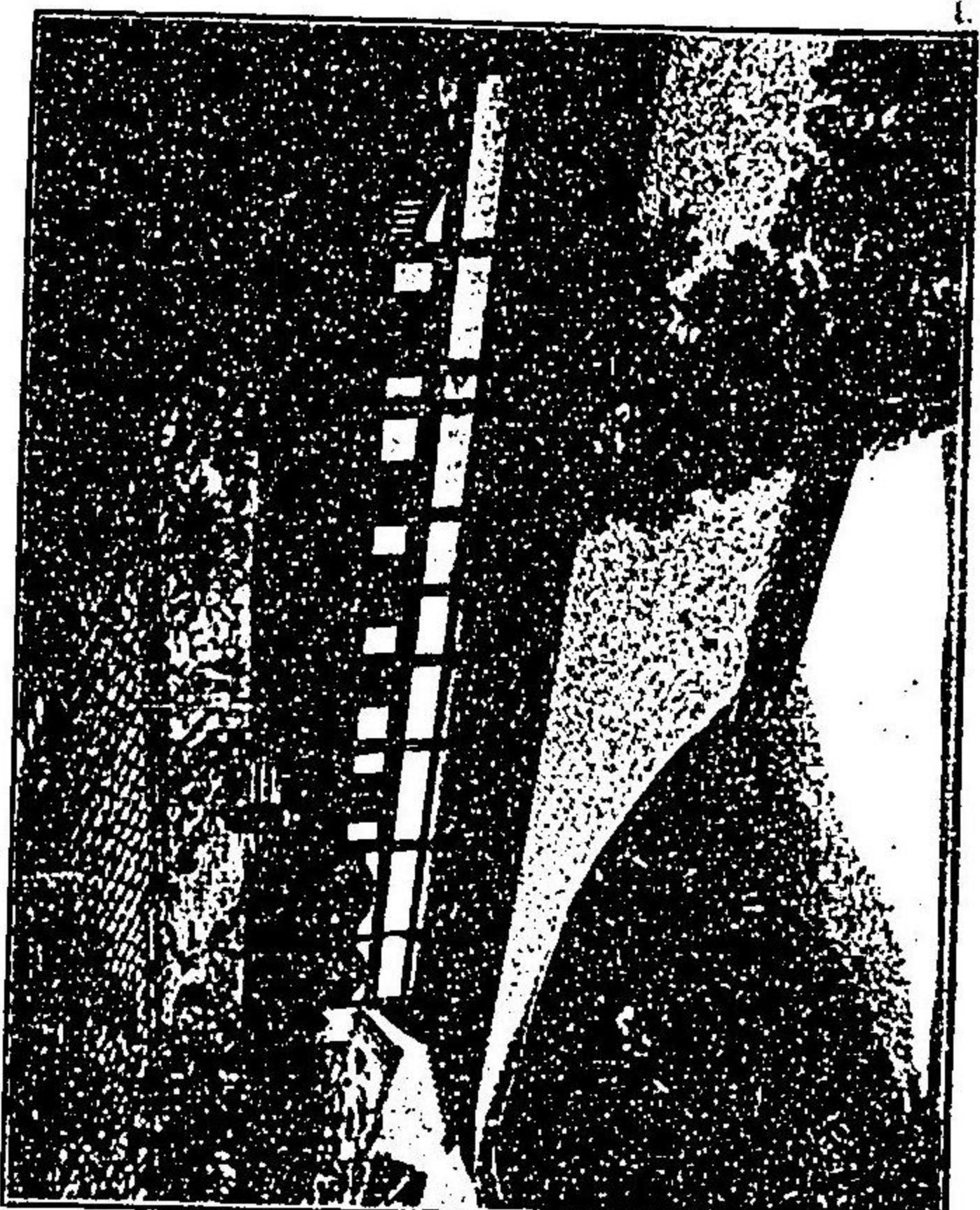
殿 佛



門 雀 中



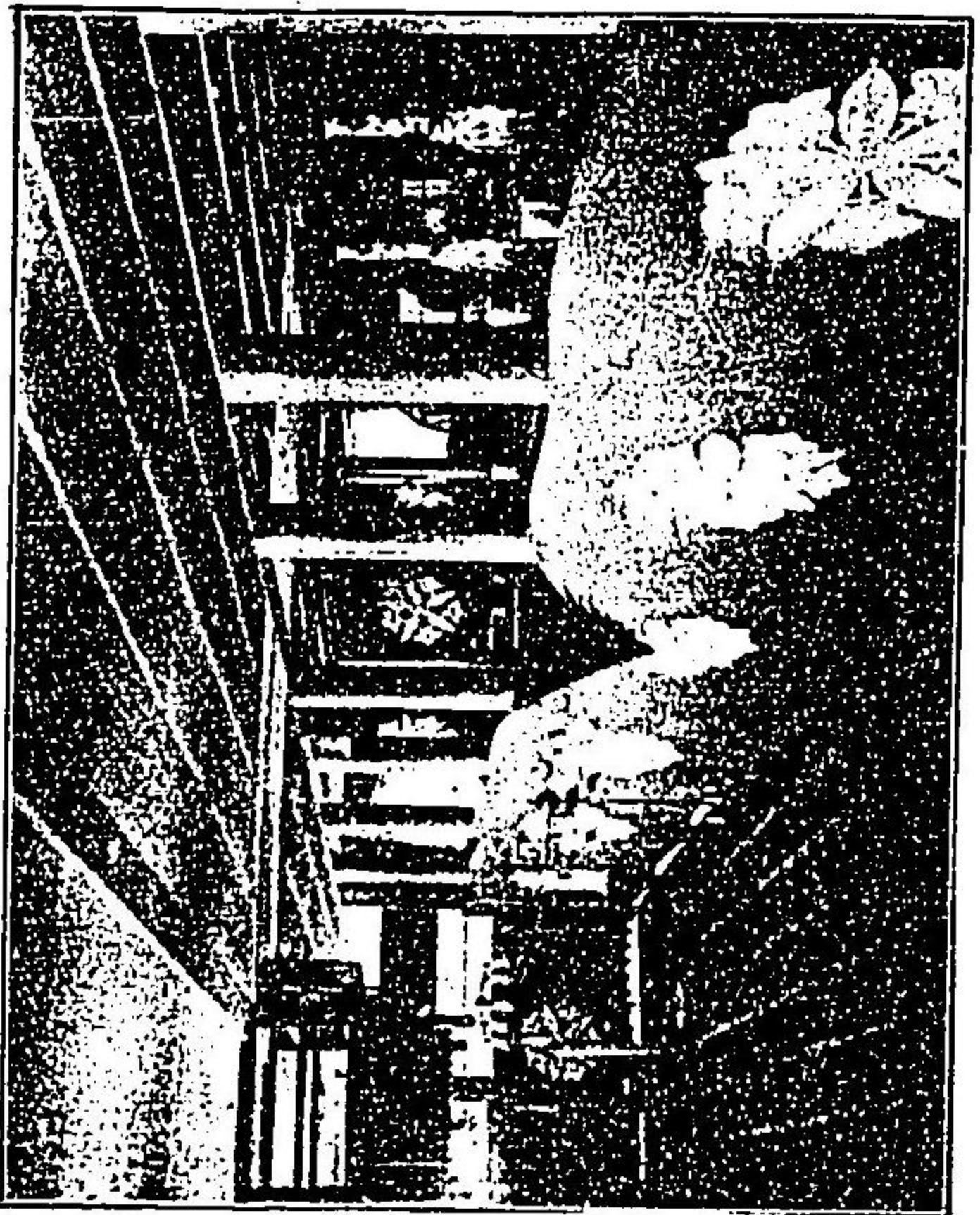
水陽殿



社堂



偃月橋



法堂の内部

目次

一	沿革の概要	………	一頁
二	諸堂舎	………	四頁
三	十境十景	………	十頁
四	承陽大師	………	十三頁
五	歴世禪師	………	二十八頁
六	大師の遺詠	………	三十一頁
七	寺役	………	三十五頁
以上			

永平寺

永平寺

沿革の概要

南越大野郡の東南志比谷村大字志比永平寺山の麓深緑滴るところに吉祥山永平寺あり神派曹洞宗の本山として輪奐善を盡し結構壯を極む蓋し北陸道中有數の寺ありとす按ずるに此地往昔波多野出雲守義重の所領たり義重曾て高祖道元和尚の高徳を聞き深く之に歸依す此地の山中に古寺の廢趾あるを復興して道元のこゝに巡錫せむことを請ふ道元喜んで之を諾し乃ち寛元元年七月を以て山城の國興聖寺を發し義重と共に此處に來り先づ庵室を吉峰に結んで之に居る尋て禪師峰に遷り翌年一伽藍を草創し七月十八日に至て開堂す名づけて大佛寺といふ蓋し義重の法號に取るなりこの寺跡は越前國名蹟考に「里民云玲瓏巖を過ぎて遙の山奥に在り寺今の水より一里半といへども遠し劔

永平寺

が峰の方にて少し低き山の八合に、方六町許なる平地なりといへるもの即是れなり同四年六月十五日改めて永平寺と稱す、佛法初めて支那に入れる後漢明帝の年號に取るといふ、寶治二年十一月一日に至り初めて吉祥山の號あり、山門の額に「南閻浮提日本國越前國吉田郡志比庄傘松峰從今日名吉祥山諸佛如來大功徳吉祥中最無上諸佛俱來入此所是故此地最吉祥寶治二年十一月一日」とあるは以て證とすへし、道元は建長五年當山を其高足孤雲に譲り、京師に上りて病を養ひ、同年八月高辻西洞院に寂す、孤雲は當山に住すること十五年にして、文永四年これを三祖徹通に譲る、四世義演を経て五世義雲に至り、禪師峰の地僻遠にして衆徒參禪に便惡しきを以て、寺地を今の處に移す、故に後世義雲を尊んで當山中興と稱す、九世宗吾住持たるに及びて檀越波多野氏爲めに後圓融天皇に奏請し、天皇乃ち勅して出世道場に補したまふ、當時本山の衰微甚しく加ふるに文明五年に至り堂塔悉く兵燹に罹りて烏有に歸す、乃ち長享元年堂宇再建の事を起

永平寺

し數年にして漸く成る、天文年間更らに出世道場の勅宣を賜はり、元和元年徳川幕府より永平寺法度を稟け、曹洞宗總本山の規模を立つ、寛文元年福井藩主越前守松平光通寺領五十石を寄附し、延寶四年同松平昌親更らに二十石を加へて七十石と爲す、此頃能本山總持寺は幕府を詐はり、岷山下の僧は永平寺に於て出世すへからすとの公帖を受く、永平寺大に其當らざるを訴へ紛糾解けること數年に涉り、五十世玄透に至りて初めて舊に復するを得たり、茲に於て小清規を著はして法式の弊害を正しくし、闕下に伏奏して勅願祈禱の御撫物を降請す、明治十二年祖廟回祿の災に罹る、十四年之を再興し、六十三世琢宗大に諸堂を修葺し、且つ道路を開鑿して寺境爲に一新す、明治三十五年大師六百五十回忌に當す、是より先き佛殿僧堂庫院不老閣諸廊下の營繕を爲し、輪奐の美昔日に倍す、これを本山沿革の概要となす、

二 諸堂舎

永平寺の伽藍は、其結構宏壯多く他に匹儔を見ざる所なり、蓋し其初めは微々たるものなりしや論を俟たず、雖法運の隆盛と共に遂に今日の大を致すに至りしなり、こゝに諸堂舎の概要を記して讀者の一察に供せむかな、

稻荷 假月橋の傍に在り、橋下に瀧あり

金比羅 稻荷と相對す、前に池あり放生池といふ

水碓房 門外に在りて水車なり

愛宕 水碓房の邊より七町許南方愛宕前山に在り、大佛寺趾に至る道の右方に當れり、

勅使門 志比村より通する坦道の正面に在り、常に鎖して喪人を通せしむることなし、天保十年三月禹隣禪師の建築に罹り、吉祥山空華翁の額あり、建坪八

永平寺

永平寺

坪餘、空華は洞宗宏振禪師

通用門 勅使門の左方に在り、天童叢規勃興名監寛政庚申辛空華老人の額あり、建坪十七坪

山門 二層の樓門にして上に十六羅漢五百羅漢下に四天王あり、階上の額は後水尾天皇の宸筆と稱へ日本曹洞第一道場と記し、階下の額には南閻浮提越

前國吉田郡志比庄傘松峰從今日名吉祥山諸佛如來大功德諸吉祥中最無上諸佛俱來入此處是故此地最吉祥寶治二年十一月一日と書し、其左右に懸けたる聯は、
正海禪師の筆なり、此山門は寛延三年大智慧光禪師の建築にかゝり、建坪四十五坪餘

舍利殿 勅使門と通用門の前面中間に在り、文久三年臥雲禪師の建築にかゝり、建坪三十二坪餘

經藏 又輪藏ともいふ浴室の上山腹にありて一切經を藏む、標月の額あり、

永平寺

嘉永四年臥雲禪師の建築にかゝり建坪二十三坪

御靈屋 隆芳院殿福井藩主第三世松平忠昌公其他の石塔なり經藏の左に並へり

廻廊 山門と法堂との間を連ね左右各四十二間幅三間其他の廻廊を加算

するときは二百三十間に及ぶ

辨財天 荒神堂 中雀門の前左右に在り

中雀門 山門を入り石階を登りたる所に在り額は臥雲禪師の筆にして梅熟

と書し聯は玄透禪師の筆なり建坪六坪餘

浴室 山門に對し右方におり臥雲禪師の筆香水海の額を掲ぐ建坪三十八

坪餘

七軒東司 山門に對し左方名古屋宿坊の背後にある雪隠なり

僧堂 玄透禪師の筆雲堂の額を掲ぐ遷佛場とて坐禪辨道の所なりこれ大

永平寺

師六百五十回忌に當り新築せしものにして縦十一間餘横十五間餘建坪百八十

六坪餘あり 瑞雲閣 舊凌雲閣と稱せしものにて佛殿の右に在り臥雲禪師の筆瑞雲閣の

額を掲ぐ檀徒等の應接場に充つこれ亦明治三十四年營繕する所にして四十九

坪餘の總二階建なり

承陽門 僧堂の前を過ぎ佛殿の左の廻廊を上りたる處更に左の方承陽殿に

至る階段の上にある唐門なり一に之を承陽の中雀門といふ

承陽殿 承陽門の正面に在り本殿には承陽大師孤雲禪師徹通禪師義演禪師

義雲禪師の像寂圓和尚寒巖和尚圓明國師の位牌ありて岩倉具視公の筆承陽殿

の額を掲ぐ拜殿は六世曇希禪師以下永平三十代並に木下道正庵開基義重の木

像及末派寺院にして特に祖堂に入ることを許されたる者の位牌を安じ環溪禪

師の筆照第一天の額と玄透禪師の筆なる聯とあり此堂は明治十二年祝融の災

永平寺

に罹り十四年天眞禪師之を再建す本殿建坪十五坪餘拜殿四十二坪餘
孤雲閣 承陽殿の左に在り二世孤雲禪師大師入寂後開山堂の傍に在りて朝
暮供養を營しか故に此名ありこの閣は承陽殿と共に烏有に歸し又同時に再建
せらる建坪六十八坪餘

佛殿 中雀門の正面に在りて中央の壇上に迦葉佛釋迦牟尼佛彌勒尊佛及
歷代皇帝の尊牌を安し左右の脇壇には達磨大師大權菩薩護法神龍王天童如淨
禪師を安す正面に玄透禪師の覺王寶殿空華叟の額あり又同禪師筆の聯あり享
保九年撫國禪師の建てられたる舊殿は開山六百五十回忌に際し毀たれて更に
新築せらる建坪百四坪餘

鐘樓堂 庫院の前に在りて教體玄透書の額を掲く鐘は義雲禪師の世の鑄造
に係る建坪六坪餘又承陽殿の前にも承陽鐘といふものありて一の樓を存す
長松院殿御石塔 開山堂の前承陽門の右方に在り長松院殿とは結城秀康

永平寺

公母永見氏なり

庫院 佛殿に對し右にある庫裏即ち厨房なり正面に庫院五十代住持玄透老
衲章駄天の前に天宮玄透叟典座寮の前に臥雲禪師の筆香雲臺の額あり建坪百
四十三坪餘

光明藏 瑞雲閣の上法堂の右なる大廣間にして轉僧の式を行ひ又禪師の拜
謁所とす玄關に大光明藏六十四世悟由叟の額あり本堂は天保十年禹隣禪師の
建築に罹る建坪百三十七坪餘

接賓 僧堂の後に在りて轉僧寺院雲衲の到着所なり建坪二十五坪餘
後堂寮 接賓に連續して後堂和尚の常住する所なり建坪二十五坪餘
妙高臺 光明藏の上にありて貴賓の接待所なり大因禪師の筆妙高臺の額を

掲く本堂は天保十五年禹隣禪師の建築にかゝり建坪五十二坪餘
不老閣 妙高臺の右に在りて禪師の方丈なり嘉永四年明覺禪師の建築する

所にして建坪第一方丈五十一坪餘第二方丈十五坪餘

寶藏 妙高臺の上山腹に在り

法堂 又法王法堂といふ有栖川宮殿下筆の法王法の額あり本尊は常に安置することなく法會の式に依て之を異にす本堂は天保二年八月禹隣禪師の建築する所にして建坪二百六十坪餘あり

此外宿坊舎且過寮等尙多しといへどもこゝに畧す

三十境十景

當山の景勝を數へて古來十一景とす玲瓏巖涌泉石偃月橋承陽春色西山積雪竹徑秋雨假山松風白石禪居深林歸鳥祖壇池月樵屋茶烟これなり高祖道元より懷井義介など詩賦歌詠に打興せし所なりとす大虛禪師に至り其境と景とを分て各十とし面山和尙これか詩を賦す其十境十景といふもの左の如し

十境

傘松峰 寺を距ること東南一里に在り老松蒼鬱傘蓋の如くなるものあるに

因り名く高祖乃ち采て大佛寺の山號とす今は別に峰を指す

劍降嶺 寺の南方に在りて衆嶽中最高し傳へ謂ふ昔寶劍此山に降ると

玲瓏巖 寺の東溪の側に在り崛起四五丈天童山に恰も之に似たるものあり

故に高祖其名を取る

虎跑泉 東溪の上一里許に瀑あり落ること十餘丈俗に之をトラフの瀑といふは高祖天童の瀑名を采りて虎跑泉と名つけしを轉訛せしなり

涌泉石 總門の下に在り溪流石に激して水勢涌くか如きが故に名く

偃月橋 總門の下に在る橋にして其形半月を偃せたる如し

白山水 祖堂の右側に出づる水にして眞前湯茶の用に供す妙理權現の献せ

し所なりと傳ふ

羅漢松 寺の東巖に聳へ靈幹兩岐を分ち其杪十丈老枝蓋を垂る高祖齋庭を
設けし時應眞長松の上に降臨すと云ふは是なり

靈山谷 靈山は寺の西北に在る院の名なり高祖席を孤雲に譲りし後此院に
歇息して洛に赴く院此谷に在り

菩提園 總門の外長杉の下にあり孤雲禪師の拠る所にして眞俗沒故するも
の皆此園に葬りて浮圖を立つ

十景

承陽春色 承陽は庵號にして寺の右肩に在り高祖の塔頭にして春至れば則

百花競ひ開く

孤雲明月 孤雲は開名にして承陽菴側に在り昔孤雲禪師の居りし所にして

軒窓東南に俗き頗る月に宜し

白石禪居 承陽菴前にある磐石にして高祖安禪の處なり

青山殘雪 四山の雪盛夏にも猶残りて暑天愛す可し

假山松風 假山は承陽庵の左側に在り老松鬱乎として濤聲耳を清くす

祖壇池月 池は承陽菴の西楹の下に在り恬澹の水月を涵して尤淨し今は此

竹徑秋雨 竹徑は孤雲閣の西に在り秋雨愛す可し

樵屋茶煙 門外を下視すれば山民宇を並べ茶煙時に茅屋の上に浮ふ

神林歸鳥 林は大工村の奥に在り林中壇を築て白山權現を祭る老樹森々山

鳥集り宿す

西嶺斜照 日海畔に落て西嶺を返照す堂前の暮色其興涯りなし

四 承陽大師

吉祥山永平寺の規模宏大多く他に匹儔を見ざるは前既に詳述せり而して此地
を選んで此伽藍を建立し完備具足今日の如きに至らしめしものは蓋し其功を

中興の祖五世義雲禪師に歸せざる可からずと雖其備を作りしものは高祖承陽大師道元和尙なることは勿論なりとす而して此の道元何人ぞや請ふ須らく其跡を尋ねしめよ

高祖道元禪師はもと貴胄に出つ父は内大臣右大將久我通親公母は攝政藤原基房の女兄は太政大臣通光公一門の尊貴斯の如し道元にして世間に志あらしめば長袖紬袴を着けて遅々たる春日は櫻かざして胡蝶と翩舞す可く蕭殺たる秋日は紅葉を焚いて酒を温たむ可く優遊自適して生を終へんこと何くんぞ難しとせむや然り凡俗は蟬蛸の快樂を喜べり而して彼れは其人にあらざるなり彼れが出世間の人たるに至りし動機を何とかなす四歳にして李矯が百詠を讀み七歳にして毛詩左傳を習ひ且つ其大義に通せし彼れは人の以て神童と爲しし所以なりしかも神童必ずしも沙門に入るに非ず抑彼れをして無常迅速を知り夢幻泡沫の理を悟らしめし大原因は何ぞ

天下に悲觀多し而して其最も大なる者を死別となす道元年漸く三歳にして嚴父を失ひ八歳にして慈母を喪ふ無常の念即ち萌し出塵の思隨て生ず伶俐なる彼れは哀毀禮に過ぎたり哀毀極つて俱舍論を讀めり讀んで而して解せり人其條目を問へば辯答流るゝか如し叔父内大臣藤原師家其英敏なるを見乞うて以て子となす然りと雖志願の熏する所何んぞ穢土に戀々たらんや吾れに父母あり以て奉養の孝を尽すべし吾れに父母なし以て救世濟衆の六願を起さる可からず是に於てか道元の眼中豈世爵あらんや豈顯貴あらむや金殿玉樓の茅屋と異なる所以は何ぞ綾羅錦繡の襪襪と選ぶ所以は何ぞ一念發起しては正に其見る所に慈進せざる可からず潜かに逃れて洛比叡山に上る石徑斜にして足を嚙むところ往くこと數里誠にこれ髻童の容易とする所ならんや唯彼れの心中熾々たる希望の燃ゆる者あり行路の嶮難何んぞ能く其志を屈するに足らんや四明の峰松濤心耳を澄ましむるところ彼れが外舅良顯大徳の住むあり道元乃

ち往いてこれに投ず、良顯其故を問ふ、道元曰く我が母既に死す、死するに臨んで遺訓あり、いはく家を出て、我が菩提を弔へど、我れ其教に違はざらんことを恐るゝのみ、師家彼れが大器たる可きを知り、愛惜措かず、強て家に歸らんことを勸むといへども、彼れは決断を再びするものに非ざるなり、牢乎として抜く可からざる心志は、金鐵亦貫かんとす、翌年道元十四歳にして、座主公圓僧正を拜し、忽ち祝髮して、圓願となり、忽ち緇衣を纏うて、數珠を爪繰る、想ふ昔、悉達王太子の尊を去つて、迦毘羅城を出づ、時古今を異にし、地東西を距つといへども、其舉措に至つては、全く一なり、嗚呼、窈窕花の如き小法師は成れり、此小法師遂に何とかなる小法師は、壇に登つて、菩薩戒を受け、稽止すること、五載、台宗の教迹悉く圓義を究む、是に於てか三井の公胤僧正が、觀心に審なりと聞き、往いて法身自性の旨を問ふ、公胤曰く、我れ能く家法を傳ふと雖、事義路に涉れり、汝其理を質さんことを願はぶ、去て佛心宗に問へど、道元其言を是なりとし、直ちに建仁寺に赴き、明庵榮西

禪師に謁す、榮西其法器たることを知り、提拏頗る感歎なり、遂に衣を更めて參侍す、道元の禪門に入るは、蓋しこれより起る
好事魔多し、道元の榮西に參禪せしより、研鑽怠ることなく、日以て夜に繼ぎ、勵精刻苦して、衣食を忘るゝに至れり、加ふるに師の能く薰陶化導するものあり、道元の聰慧明敏なる豈心會するところなからむや、然り花は將に開かむとして、白風のこれを妬むものあり、月は將に輝かんとして、陰雲のこれを遮るものあり、道元の眼中時に曙光を認めて、再び前途黒闇々たらんとす、何ぞや、恩師榮西の遷化すなはち是れ、
嗚呼、天無情、道元今や心眼を開かむとして、其標的を喪ふ果して、道元の爲めに不幸なりとせむや、將た幸なりとせむや、道元既に略佛心宗の妙味を知れり、其師は死して而して復た求む可からざるも、法は存して滅せず、彼れは師に依りて法を求めむとするものに非ず、法に依て理を得んとする者なり、榮西の沒悲しむ可か

らざるに非ず、但彼れは先きに認め得たる微光によりて前途茫々の曠野を直進せむとす。左顧右盼して岐路に入らんは、彼れの最も恐るゝ所たるなり。蔡西亡しといふといへども、佛心宗は捨つ可からず、則ち蔡西の法嗣明全禪師に従ひ、六裘葛の間、不屈不撓參禪の際には、大藏經を閲して自ら顯密の奥旨を悟り得たり。然りと雖、道元未だ見性の全きを得ざりしなり、而して是を國中に求めんと欲せば、何人に従つてか能く得べき以爲らく、佛法印を傳んことを願は、入宋して求法するに如かじと、偶明全の入宋するに遇ひ、則ち意を決し、共に海に航して支那に赴く。時は貞應二年二月、洛北の山洛東の水山は紫にして水は明なり、共にこれ坐臥に親みしところ、一朝蹶然起つて法を求めんが爲めに、此好風景を捨て、舟を茅渚の海に懸す、水波穩かにして浮鷗眠り、春帆風を孕んで走すること甚だ疾し、山陽の曲浦南海の蟹舍相對して、大島送り小島迎ふ、忽ちにして兩山互に迫りて、江の如し來ること幾何

ぞ、文字が關左に在り、赤馬が關右に在り、既にして怒濤澎湃、乘舶上下して、葉よりも軽く、玄海益荒れて、終に本國を失ふ、蓬窓夢圓かならず、幾度か延曆建仁に遊んで、舶は唐土の濱に在り、往きく、て明州の界に至る、これを寧宗の嘉定十六年とす、直ちに天童山に登れは無際派公其主位にあり、道元之に謁して、太た器重せらる、留ること二年にして、辭して徑山に至り、浙翁瑛公を禮して問答す、これより去つて諸方の叢林を叩き、普く一世の知識を訪ひ、將に歸帆を理せむとす、偶一禪者老璣なる者あり、曰く、天童の長翁如淨禪師は一時の名匠たり、爾往て之に參見せよと、道元乃ち錫を杖つて、再び太白に登る時に、理宗の寶慶元年五月なり、如淨相看て欣然として曰く、時昔の日、悟本大師の至るを夢めり、爾は是れ再來の人ならん、他日當に大に吾宗を弘むべきなりと、禪待頗る優渥、即ち其參堂を許す、道元日夜參得して、如淨の示誨を蒙る、一日如淨巡堂し、僧の坐睡するを見呵して曰く、夫れ坐禪は身心を脱落せ

永平寺

むか爲めなり、只管打睡せば、什麼を作すに堪ん、と道元傍に在て之を聞き、豁然として大悟する處あり、明旦室に詣りて、熏香禮拜す、如淨便ち印證す、是に於て佛心印を單傳して、曹洞宗の濫奥を窮盡す、三年九月佛祖正傳の菩薩戒を受け、十月如淨附するに芙蓉道楷所傳の法衣一領、佛祖一大事の嗣書及ひ自讚の頂相を以てす、曰く汝異域の人なり、仍て此物を授けて法の信と爲すと、又曰く汝本邦に歸らば深山僻陬に隠れ、謹んで國王大臣に近づくこと勿れ、と道元作禮して出づ、傳へいふ、道元宋に在るの一日、郊野に臥す、猛虎の來り襲ふものあり、道元則ち拄杖を採つて之に投ずれば、龍に化して虎を追へり、是を虎擲の拄杖といひて、今も永平寺に藏せりと、俗談固より信するに足らず、而かも亦以て道元の威儀を窺ふべし、
寶慶三年、道元別を如淨に告げて、將に發せんとす、前夜碧巖を授けらる、時に白山權現來現して、道元を輔け、一夕にして、盡く書寫するを得、これを一夜碧巖と名づ

永平寺

く、既にして商舶に乗して海に入る、海上時に波濤起りて、奔馬の如し、道元乃ち靜かに船舳に立ちて、普門品を讀誦すれば、觀音薩埵蓮葉に乗して、浮ひ出で、風波忽ち収まりて、一碧復た砥の如し、今彼の寺に藏する一葉の觀音と號するは、即ち此像を寫し、なりといふ、
道元鎮西に着し、肥後國河尻郷に如來寺を創め、次て京師に登り、暫らく建仁寺に寓す、其歸朝は安貞元年十二月なり、士庶風を聞いて、税下に拜謁するもの相踵ぐ、弘誓院正覺尼、道元の爲に地を城南深草に相し、天福元年三月、一精藍を創建し、名づけて興聖寶林寺と稱し、道元を請して、第一世たらしむ、嘉禎二年、開堂演法し、懷中の瓣香如淨、禪師の爲めに拈出す、其の叢規は一に太白に則る、居ること十年、越前の波多野義重、入道如是、其高風を崇仰し、寛元の初、其領地吉田郡志比庄に請す、此より先き、道元を招くもの十數ヶ所に及ぶ、道元敢て動轉することなし、曰く大地名藍は、我が望むところに非ずと、既にして義重の請狀至る、道元欣然として、曰

永 平 寺

く吾師如淨禪師は震旦越州の人なり今越前より吾を迎ふ吾れ恰も師に見ゆるの思あり殊に白山權現は吾が碧巖書寫を輔け給ひき何んぞ往かざる可けんやと乃ち寛元元年七月興聖寺を出て吉峰に錫を留め尋て禪師峰に移る其伽藍を名づけて傘松峰大佛寺といふ大佛寺とは義重の法號大佛寺殿如是元性より取りしなり其開堂は同二年七月十八日にあり清規を定むること復興聖の如し同四年六月十五日改めて永平寺と號す曰く天竺より震旦に佛法の波來せしは其永平年中に在り而して今又漢土より我朝へ微細に佛心宗を傳ふ故に三國通用の理によりて永平寺と稱せむと寶治二年十一月一日山號を吉祥山と稱す曰く當山の風光恰も天童のそれに似たり寂寞たる深谷自然の佳境なり佛法を興隆せむに最も吉祥の靈地なりと道元當寺に晋山の時天龍雲を興し山神形を現じ竹木叢林共に歡喜の色を表せり又蛇に化したる女人の來るあり道元これに血脈を授くれば忽ち光明赫奕として天に昇ることを得たり如之ならず羅漢供會

永 平 寺

には種々の菩薩靈光を放つて降臨し老松の梢に宿られしことあり菩薩の大戒を行はるゝ時には無量の菩薩蒼空に充滿し音樂一山に響きて異香寺中に薫じ天より華ふること數刻に及ひしことあり諸これ等の傳説は以て如何に世上の景仰欽慕の深かりしかを知るに足らんなり法席日に盛にして四來の包笠常に萬指に滿ち參立辨道の徒千頭を數ふへし寶治元年執權北條時頼道元を鎌倉に請じて菩薩戒を受く陪臣士庶の共に戒を受くるもの幾千人なるを知らず時頼爲に一精藍を建て、其留錫止住せむことを乞ふ道元聽さず翌年孤筇漂然去つて南越に歸る時頼又越前六條の保三千石を割きて之を永平寺に寄せ以て香華の料に宛てんとす道元又受けず想ふ昔道元太白を出づるの日如淨彼れに告げて曰へり謹て顯貴に近づくこと勿れど如淨が凜乎たる音容は尙止つて耳目にあり其師を尊崇すること常律を逸せし彼れは決して其遺訓を忘るゝ能はざるなり嗚呼實に遺訓あり何くんぞ名利に住するを好まむ又何くんぞ喜捨を受く

るを用ゐむ志比庄好箇の清境あらむ限り彼れは動轉を欲せざるなり、
道元の聲譽益天下に鳴りて道徳益堅固なり既にして事後嵯峨天皇の御聞に達
す天皇御感淺からす直に勅使を派して紫衣を賜ひ且つ佛法禪師と號せらる道
元謙退して固辭すること再三而かも皇詔許したまはず道元已むを得ずして之
を拜受し偈を上りて天恩の優渥なるを謝す曰く

永平雖空淺 勅命重重々 却被笑猿鶴 紫衣一老翁
而して其紫衣は之を高閣に奉して終身體に着けず、

建長四年夏道元微恙を感ず心氣神に通せる彼れは豫め前途促迫して遂に起つ
可からざるを知れり乃ち大衆を集めて遺教經を講し如來最後の垂範に擬す時
に京都の親族使を遣して之を迎ふるあり七月永平寺を法嗣孤雲懷非に譲り八
月初五駕を命して京に入り高辻西洞院なる俗弟興聖寺の施主覺念の家いに投し
て病を養ふ此間覺念枕頭に就て看護に従ひ俗縁久我氏使を派して病狀を訪ひ

永 平 寺

特に後嵯峨上皇は國醫に詔して脈を診せしめ給ふこれたゞ一個の老衲らうさつ宸念之
に及んで恩遇かくの如く厚し道元の面目是に於てか極まる病益重くして僧侶
の拜瞻するもの朝昏門に填つ道元靜かに身を横たへて應對平生に異なるなし
嗚呼これ大涅槃に入らんとする大知識の容態なり正に朝月淡く山の端に落ち
んとする者の如きなり二十八日夜澡沐衣を易へ偈を書して曰く

五十四年 照第一天打箇躑躅 觸破大千嘆 渾身無着處 活陷黃泉

書し終りて道元端座瞑目す彼れは既に涅槃に入れり世齡五十有四法臘四十有
一三日の間顔色生けるが如く靈香四方に薫せりといへり道俗の悲歎何ぞ限ら
ん悲歎して而して何の得る所なし乃ち遺骸を東山赤辻の精舎に荼毘し九月六
日舍利羅を收むること無數法嗣懷非之を奉して十日越前に歸り十二日入涅槃
の式を行ひ永平寺の北隅に葬る道元生前決して彩衣を用ゐることを爲さず唯細
衣を着くるのみ遺誠して牌位を設けざらしむ其高潔概ね斯の如し而して法合

永平寺

(二十六)

の嚴峻なること他に比なく最印可を重むす故に嗣法の高足唯懷辨詮慧僧海法
明の四人あるのみ著はす所正法眼藏九十五卷永平清規學道用心集等あり又廣
録十卷は寒巖尹これを持して入宋し瑞巖の無外遠靈隱の退耕寧徑山の虛堂思
諸老爲めに序跋をつくれり、
道元生前の日朝恩を蒙りしこと既に渥し然り而して滅後に於て亦聖眷に浴せ
り嘉永五年八月二十八日彼れか六百回忌に値ふ越わて七年二月二十四日孝明
天皇禪師の化儀を賛歎まし、佛性傳東國師の徽號を追諡し賜ふ勅に曰く
勅す吉祥山永平寺開基道元禪師は本華胄より出て、便ち桑門に入る重瞳室
を照して夙に人天の師を表し、一葦海に航して遙に佛祖の道を求む禪慧圓淨
にして彼の震旦の雲を辭し身心脱落して我日出の邦に歸る有爲の法を觀じ
て萬物を普濟し無礙の慈を以て衆生を覺悟す、興聖を城南に創め吉祥を北越
に開く玄化偏く覆ひて芳聲遠く播き九重想を延きて萬里誠に契ふ相門は貴

永平寺

を降り武夫は勇を銷す盛なるかな妙機大なるかな道德爾來瓜瓞綿々として
永平六百の星霜を閱し馨香芳々として楓宸一脈の天風に薰す綱に厥の人を
懷ふ豈微號なからむや宜しく佛性傳東國師と諡すへし原文
明治十二年十一月二十二日今上天皇陛下更に承陽大師の徽號を加賜し給ふ
佛性傳東國師
諡承陽大師
太政大臣從一位三條實美奉
明治十二年十一月廿二日
天皇御璽
明治三十五年四月六百五十回忌の大法會を行ふ法燈晃々千載に滅せすと云ふ
へし、

(二十七)

開山忌は、舊來毎年八月廿二日より廿八日に至る迄大施行をおこなひ來りしが、今は陽曆に推歩して九月廿三日より廿九日に至るまでとせり

五 歷世禪師

承陽大師示寂の後、今に六百五十載其間禪師の代を重ぬること六十有四法燈輝輝として益明かに法脈綿々として益榮ゆ、誠に弘教の繁昌永平の名に負かず、寺門の隆盛吉祥の名に添へりといふべし、今高祖より現住に至るまでの禪師を列舉して讀者の一粲に供せむ

高祖	道元禪師	二世	孤雲禪師	三世	徹通禪師
四世	義演禪師	五世	義雲禪師	六世	曇希禪師
七世	以一禪師	八世	喜純禪師	九世	宗吾禪師
十世	永知禪師	十一世	祖機禪師	十二世	了鑑禪師

永 平 寺

十三世	建綱禪師	十四世	建撕禪師	十五世	光周禪師
十六世	宗縁禪師	十七世	以貫禪師	十八世	祚棟禪師
十九世	祚玖禪師	二十世	門鶴禪師	二十一世	宗奕禪師
二十二世	祚天禪師	二十三世	秀察禪師	二十四世	龍札禪師
二十五世	良頓禪師	二十六世	良義禪師	二十七世	英峻禪師
二十八世	門渚禪師	二十九世	御洲禪師	三十世	光紹禪師
三十一世	月洲禪師	三十二世	愚門禪師	三十三世	徹翁禪師
三十四世	高郁禪師	三十五世	晃全禪師	三十六世	本祝禪師
三十七世	天梁禪師	三十八世	巖柳禪師	三十九世	承天禪師
四十世	喝玄禪師	四十一世	雄禪禪師	四十二世	江寂禪師
四十三世	央元禪師	四十四世	越宗禪師	四十五世	湛海禪師
四十六世	良順禪師	四十七世	董元禪師	四十八世	台明禪師

- 四十九世 國元禪師 五十世 玄透禪師 五十一世 惠元禪師
- 五十二世 宣峰禪師 五十三世 爲戒禪師 五十四世 出海禪師
- 五十五世 大因禪師 五十六世 雲居禪師 五十七世 禹隣禪師
- 五十八世 道海禪師 五十九世 觀禪禪師 六十世 臥雲禪師
- 六十一世 環溪禪師 六十二世 雪鴻禪師 六十三世 琢宗禪師
- 六十六世 悟由禪師(現住)

初世の禪師は法嫡相傳へられたるは勿論なり而して後世に至り所謂關東三ヶ寺即ち國府臺の總寧寺麻生の龍穩寺富田の大中寺より交番轉住の例を開き維新の後にはまた選舉制によることゝなりぬ能本山總持寺貫首と當寺貫首とは隔年交代して曹洞一派の管長たり而して其禪師號を賜はるの例を開きしは二十一世宗奕禪師の徳川氏の命に依りて堂頭となり大通智光禪師と號したるより初まる。

六 大師の遺詠

承陽大師は詩人にあらず、また歌人にあらず、而かも時に應じて詩を賦し、物に應じて歌を詠せしなり。蓋しこれ思内に鬱して聲外に發するもの故に大師の詩歌は推敲の餘に出しものにあざれば、風調甚た佳良と稱す可からざるも、高潔洒落にして凡俗の上を超然たるを認むべきなり。片々風流淡の文は學んで爲す可し、脱塵超俗の章は乃ち然らず、嗚呼これ詩か否法の聲なり、これ歌か否佛の聲なり、今其數章を摘録す。

雙忘却捨思、翛然萬物同時現在前。佛法從今心既盡、身儀向後且隨緣。
 大用現前當眼新、雖然如是曷呈真。愁人莫向愁人說、向道愁人愁殺人。
 生死可憐雲變更、迷途覺路夢中行。唯留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲。

題世尊出山相 二首

永平寺

(三十二)

腰頭帶箇風流袋。奪得松風且出內。更賣臘梅拈一枝。往來天下圖人貸。六年苦行。一坐成覺。啓地萬劫笑端。是什麼破木杓。

洞山因僧問時節恁麼熱。向甚處回避。山曰向寒熱不到處回避。僧曰作麼生。是寒熱不到處。山曰寒時寒殺。開黎熱時熱殺。開黎。

寒熱來時撒手行。眉毛落盡喪虛名。太平本是將軍致。莫使將軍見天下。

自贊

老梅樹老梅樹。長養枝々葉々春。兀地一機歷々。莊嚴三昧塵々。拄杖頭全無節目。蒲團上有十方身。弄鳳毛而捉得天童鼻孔。入虎穴而一笑大休口唇。住山頑石。叢林陳人。

示衆云佛々祖々先發誓願濟度衆生而拔苦與樂。乃家風也。頌曰。祇箇是家風。明々而不窮。山高而見月。雲靜先知空。撒手懸崖下。分身萬像中。任地登鳥道。自愛是神通。

永平寺

山居

幾悅山居尤寂寞。因斯常讀法華經。專精樹下何憎愛。月色可看雨可聽。西來祖道我傳東。釣月耕雲慕古風。世俗紅塵飛不到。深山雪夜草庵中。前樓後閣玲瓏起。峰頂淨圖六七層。月冷風高箇時節。夜傳半夜坐禪僧。

卽心卽佛

怨怒やかもめどもまた見わかぬ立る波間に浮き沈む哉

涅槃妙心

いつも唯我ふる里の花なれはいつもかはらす過ぎし春かな

正法眼藏

波も引風もつなかなぬ捨小舟月こそ夜半のさかりなりけれ

教外別傳

荒磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべき法ならはこそ

(三十三)

牛過窓櫺

世の中は窓より出る牛の尾の引かぬにとまる心ばかりそ

夢中説夢

本来もみな偽のつくも髪おもひみたるゝゆめをこそとけ

山居

立よりて影もうつさし溪川の流れて世にし出んと思へは

無常

朝日まつ草葉の露のほごなきにいそぎな立そ野邊の秋風

同

世の中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやごる月かけ

不立文字

いひ捨し其言の葉の外なれば筆にも跡をこゝめざりけり

草庵雜詠

春風にわが言の葉のちりけるを花の歌とや人の見るらん

坐禪

守るごも思はずなから小山田のいたづらならぬ僧都也尾

同

濁りなきこゝろの水にすむ月は波もくだけて光とぞなる

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たわつされども道は忘れさりけり

七寺役

幾百の大衆と幾萬の檀徒を率ゐて一山を經理す須らく寺府なかる可からす既に寺府あり則ち寺吏なかる可からす曹洞の制組織綿密細大其職に當る者を設

永平寺

けて荷も支離滅裂すること勿らしむ今其職名と各職掌司する處とを擧げて参考に資す。

兩序 佛殿法堂等に於て誦經の際主席の左右に列するをいふ故に或は

兩班とも云ふ

堂頭名一東堂 一寺の住職にして諸役寮を統率す

西堂 堂頭を補佐して禪堂を總督す

六知事 東序に列す

都寺 會中の總督なり近世は名のみにして實は監寺其事務を行ふ

監寺 堂頭に代りて山内の事務を總轄す

副寺 監寺の補佐を爲し又會中會計事務を管理す

維那 公界の總指揮にして近世は舉經を司る

典座 庫裏諸般の事務を司る

永平寺

直歲 伽藍の修繕を司る

六頭首 西序の列に在り

首座名一第一座 百日の立職の勤行を経つゝあるものにて古は會中第一の

人を以て之に充つ近世曹洞に於ては僧侶出世の位階と爲すを以て別に法

則あり後長老といふものは是なり

書記 首座を補佐す

知客 來賓の取扱に關することを司る

知浴 浴室に關することを司る

知殿 佛殿に關する事務を司る

五侍者 堂頭和尚に隨侍す

燒香 堂頭の代香を爲し又は之に隨侍す

書狀 堂頭の書記なり

請客 堂頭を訪問する來賓の待遇を司る

衣鉢 堂頭の法衣等を司る

湯藥 堂頭の衛生に關することを司る

眞堂侍者名一侍眞 開山の給仕を司る

聖僧侍者名一侍聖 僧堂内に在りて聖僧の給仕を司る

列職

寮主 衆寮の看讀を司る

寮元 寮主に同じ

寮長 寮主に同じ

副寮 寮司を補佐す

望寮 副寮に同じ ○以上衆寮の五寮主といふ

街防 門外諸般の購入物を司る

化主 淨財喜捨の勸誘を司る

磨頭 米穀の整理を司る

飯頭 典座を補佐し庫裏の諸務を司る

菜頭 飯頭を補佐し庫裏のことを司り調菜を本務とす

炭頭 木炭に關することを司る

爐頭 爐に關することを司る

火頭 火に關することを司る

園頭 山内の菜園又は備夫に關することを司る

莊主 寺院所有の田畠に關することを司る

淨頭 兩便所の掃除を司る

水頭 浴所に隸屬して浴室に關することを司る

堂主 延壽堂主即ち病院の長なり古は無常役といへり

辨事

首座寮の雑務を司る

堂司

維那の異名なり近世維那の下役として一の職務となれり

客頭行者名一知隨

知客の行者なり

知庫

副寺の下にありて其會計事務を補佐す

鐘司名一鐘點

梵鐘に關することを司る

侍香

今は五侍者の一たる請客この事を行へり

淨人

大衆の飯食の給仕を司る

米頭名一看糧

飯米の事を司る

供頭

知殿に隨侍する職なり

主塔

山内に在る諸侯の廟所を司る

送供

喫飯給仕の時諸事を司る淨人の頭なり

茶頭

來賓及會中公界の行に茶を司る

寮看

各寮の僧の他行せし時居残るへき當番なり

巡山

山内の巡邏點檢を司る

薪頭

薪に關することを司る

聽呼名一侍供

行者の下役なり

以上は高祖か清規に定めたるどころの者なり其後時世の變遷と共に廢置するもの亦多し

永平寺

明治三十五年高祖六百五十回忌法會の前一月、余永平寺に上山し、寺域の廣伽藍の大なるを見て、古徳を欽仰するの念轉熾なり、乃ち歸來此小篇を草す、副司寮の沙門檜瑞運師余の爲に校閲の勞を採ること太た審詳なり、併せ記してこゝに謝意を表すと云爾

南越福井客中糸雨日置謙識

明治四十一年九月十八日印刷
明治四十一年九月二十二日發行

永平寺奥附

編者 日置謙

福井縣佐佳枝上町八十七番地
發行者 中村六三郎

金澤市高岡町九十番地
印刷者 澤田助太郎

金澤市高岡町九十番地
印刷所 明治印刷株式會社
電話二十九番

福井市佐佳枝上町

發賣所 中村興文館

發賣所 金澤市片町 宇都宮書店

